

後漢の匈奴・烏桓政策と袁紹

渡 邊 義 浩

Abstract

はじめに

後漢末、地球規模で約三度低下した平均気温⁽¹⁾は、中国の生産力の中心を黄河流域から長江流域へと移していく一方で、北方・西方の異民族の中国への侵入をもたらした。北方・西方の異民族は、やがて四世紀には五胡十六国時代の諸国家を形成していく。北方・西方の異民族のみならず、朝鮮・日本といった東アジア諸国家の本格的な始動も同じく四世紀からであることは、三国・西晋という三世紀の中国国家が、漢四百年の伝統を受けながら、異民族に対する様々な政策を展開していった一つの証であろう。

黄巾の乱を契機に、後漢の衰退が誰の目にも明らかになっていったとき、後漢を守ろうとする異民族があった。右賢王の於扶羅に率いられた匈奴である⁽²⁾。また、官渡の戦に敗れた袁紹が卒し、追い詰められた袁紹の二子を守ろうとする異民族もあった。袁尚・袁熙を助けて曹操と戦った烏桓である⁽³⁾。

匈奴と烏桓は、なぜ後漢を、そして袁氏を守ろうとしたのであろうか。本稿は、その理由を後漢の匈奴・烏桓政策から解明し、さらに袁紹の異民族政策との関わりを論ずるものである。

一、不臣から臣へ

前漢武帝のとき、激しく漢と戦った匈奴が、漢に帰順したのは、宣帝の甘露三(前五)年のことである。それに先立ち、宣帝は、来朝する呼韓邪単于への対応を集議に附していた。集議は、匈奴の単于の位を諸侯王の下に置

くべきとする丞相の黄覇・御史大夫の于定国の議と、単于に不臣の禮を加え、位を諸侯王の上に置くべきとする蕭望之の議に分かれた。宣帝は、蕭望之の議を是とし、客禮によって呼韓邪単于を待遇し、その位を諸侯王の上と定めた(『漢書』卷七十八 蕭望之伝)。こうして漢は、匈奴と和親を結んだのである。

単于を臣下とすべきと説いた黄覇・于定国の議は、『春秋公羊伝』成公十五年の「春秋は、其の国を内として諸夏を外とし、諸夏を内として夷狄を外とす(春秋、内其国而外諸夏、内諸夏而外夷狄)」を論拠とする。これに対して、宣帝期に出現した『春秋穀梁伝』は、華夷混一の理想社会の実現を説いていた。そこで宣帝は、単于来朝の四ヵ月後、蕭望之を司会に石渠閣會議を主宰する。新たな匈奴政策の依拠すべき經典となった穀梁伝を公認するためである。會議の結果は「多く穀梁に従い、宣帝の意向どおりとなった(『漢書』卷八十八 儒林 瑕丘江公伝)。ここに漢の華夷思想は、公羊伝の厳しい攘夷思想から穀梁伝の華夷混一へと大きく展開したのである⁽⁴⁾。

宣帝以来の匈奴との和親を破壊した者は、王莽である。王莽が漢の外交関係を一新して、夷狄を下に置く政策を展開した理由は、『禮記』曾子問と『春秋公羊伝』隠公元年に基づき構築された「天に二日無く、土に二王無き(天無二日、土無二王)」天下の「二統を大(大一統)」⁽⁵⁾ぶという世界観にある。

単于を臣下と位置づけられた匈奴は、中国への侵攻を繰り返し、莽新の崩壊を促す赤眉の乱を惹起する。

莽新に代わって後漢が建国された後にも、匈奴の侵攻は続いた。ようやく、

建武二十四（四八）年になって、薁鞬日逐王の比が、祖父の呼韓邪单于の称号を継いだことを漢の五原塞に伝え、翌建武二十五（四九）年に、「称臣」して「旧約」を修めた。大飢饉の中、匈奴は南北に分裂し、蒲奴单于（比の独立後は、北单于）から、南辺八部の「大人」に推戴された比が、臨落戸逐鞬单于（最初の南单于）となって独立し、呼韓邪单于と称して、後漢との和親を求めて来たのである。

南单于 復た使を遣はして闕に詣らしめ、藩を奉じて①臣と称し、国の珍宝を献じ、使者の監護を求め、侍子を遣はし、②旧約を修む。

②「旧約」とは、ここでは宣帝の故事を指す。したがって、南单于の比は、自ら謙遜して①「称臣」すれば、祖父の呼韓邪单于と同様、客禮により「不臣」として待遇されると期待したと考えてよい。ところが、光武帝がこれを集議に附すと、群臣は「夷狄の情は偽にして知り難く、許す可からず（夷狄情偽難知、不可許）」（『後漢書』列伝九 耿弇伝附耿国伝）として、南单于の申し出を拒否すべしとする意見が多かった。そうした中、ひとり耿国だけが宣帝の故事にならって南单于の申し出を受けることを主張し、光武帝はこれに従ったと記録される。

しかし、外交の実態は、宣帝の故事とは異なるものであった。

（建武）二十六年、中郎将の段郴・副校尉の王郁を遣はし、南单于に使ひし其の庭を立てしむ。五原の西部塞を去ること八十里なり。单于乃ち延きて使者を迎ふ。使者曰く、「单于 当に①伏拝して詔を受くべし」と。单于 願望すること頃有りて、乃ち伏して②臣と称す。拝し訖はりて、詔をして使者に曉さしめて曰く、「单于 新たに立ち、誠に左右に慙づ。願はくは使者 衆中にて相屈折せしむること無かれ」と。骨都侯ら見て、皆泣下る。郴ら反命するや、詔して乃ち南单于の入りて雲中に居るを聴す。

光武帝の使者となった中郎将の段郴は、南单于に対して、その庭を五原の西部塞より八十里の地に立てさせる一方で、单于に①「伏拝して詔を受」けるよう要求する。南单于に臣禮を取らせようとしたのである。南单于は少しためらったのち、やむなく②「臣と称し」て光武帝の詔を受けた。穀梁伝に

基づく宣帝の故事とは異なり、公羊伝の厳しい夷狄観が表出する後漢の外交政策の結果、匈奴は臣従を余儀なくされた。匈奴を保護・監視する使匈奴中郎将が置かれたのも、この時である。北匈奴との対決を控える南匈奴は、臣従してでも、後漢からの協力を得る必要があったのである。

こうして協力し得た後漢と南匈奴に攻撃され、衰退した北匈奴の優留单于は、章和七（八七）年、鮮卑に殺害される。後漢は、永元元（八九）年には、征西大將軍の耿秉と車騎將軍の竇憲に北匈奴を討伐させ、北单于を稽落山の戦いで大破する。さらに、永元二（九〇）年、南匈奴の休蘭戸逐侯鞬单于と共に、使匈奴中郎将の耿种が北单于を襲撃し、永元三（九一）年、右校尉の耿种の遠征により北单于を敗走させる（『後漢書』列伝七十九 南匈奴伝）。こうして、北匈奴は中華圏から姿を消したのである。

二、体制内異民族

漢に臣従した南匈奴は、歳ごとに使者を派遣して、人質の意味も持つ「侍子」を送って入朝させた。中華と夷狄として表現される儒教の世界観は、朝貢に来る異民族が中華の周縁に存在することを必須としていたためである。

单于 歳尽に輒ち使を遣はして奏を奉じ、侍子を送りて入朝せしめ、中郎将の從事一人、将領して闕に詣る。漢は謁者を遣はして、前の侍子を送りて、单于の庭に還らしめ、道路に交会す。元正に朝賀し、陵廟を拜祠し畢はるや、漢 乃ち单于の使を遣り、謁者をして将送せしむ。綵繪千匹・錦四端・金十斤・太官の御食の醬、及び橙橘・龍眼・荔枝を賜ひ、单于の母、及び諸々の閼氏・单于の子、及び左右賢王・左右谷蠡王・骨都侯の功善有る者に、綵綵を賜ふこと合して万匹。歳ごとに以て常と為す。

南单于が毎年、使者を派遣し、上奏文とともに侍子を送ると、漢は謁者に先の侍子を送り返させる。元旦に朝賀し、陵廟を拝した後には、单于に使者を出し、きわめて多くの回賜を与えることが、「歳ごとに以て常と」されていたという。

こうした後漢の待遇に対して、比の子である休蘭戸逐侯鞬单于の屯屠何

は、「臣らは漢の地に生長し、口を開きて食を仰ぎ、歳時の賞賜は、動もすれば輒ち億万、垂拱して枕に安んずと雖も、報効の地無きことを慙づ（臣等生長漢地、開口仰食、歳時賞賜、動輒億万、雖垂拱安枕、慙無報効之地）」と述べ、漢のために戦うことを誓っている（『後漢書』列伝七十九南匈奴伝）。後漢が南匈奴を体制内に組み込み、その協力を引き出していることを理解できよう。

そうした物理的な戦闘力に加えて、南匈奴は理念的にも、後漢「儒教国家」の体制を支えていた。儒教では、天子が世界の支配者であることを表現するため、天子に朝貢する夷狄を必要とする。強力な夷狄が遠方から朝貢すればするほど、天子の徳は引き立つ。「儒教国家」は、その体制内に夷狄を必要としていたのである。南单于是、「儒教国家」の儀禮において、次のような役割を果たしていた。

東都の儀、百官・四姓親家の婦女・公主・諸王の大夫・外国の朝者侍子・郡国の計吏 陵に会す。晝漏上水、大鴻臚 九賓を設け、寢殿の前に隨立せしむ。^(三)

明帝が光武帝の原陵の上で始めた墓祭である上陵の儀禮において、陵に会する者のうち、「四姓親家の婦女」は、外戚の樊・郭・陰・馬氏の四姓とその親族の婦女であり、「公主」は皇帝の娘、「諸王の大夫」は、正月に璧を奉じて皇帝に拝賀する王の使者である。また、「郡国の計吏」は、毎年郡国から上京し、会計報告をするとともに、貢献物を上納して、中央と地方郡国との間の貢納・従属関係を更新する役割を果たしていた。^(四)「外国の朝者侍子」は、かれらと並んで、上陵の儀禮に参加している。しかも、「九賓」について、薛綜は、「九賓とは、王・侯・公・卿・二千石・六百石より下は郎・吏・匈奴の侍子に及ぶまで、凡そ九等を謂ふ」と述べ、「外国の朝者侍子」の中で、「匈奴の侍子」が特別に「九賓」として優遇されていたことが分かる。^(五)夷狄の中における匈奴の理念的な重要性が理解できよう。このように、南匈奴は、後漢「儒教国家」において、体制内異民族として欠くことのできない地位を確立していたのである。

こうした匈奴のあり方は、後漢「儒教国家」の経義を定めた『白虎通』に

おける夷狄の定義にも、次のように反映している。

王者の臣とせざる所の者は三、何ぞや。二王の後、妻の父母、夷狄を謂ふなり。……夷狄なる者は、中国と域を絶ち俗を異にし、中和の氣の生ずる所に非ず、禮義の能く化する所に非ず、故に臣とせざるなり。春秋伝に曰く、「夷狄相誘なば、君子疾まず」と。尚書大伝に曰く、「正朔の加へざる所、即ち君子の臣とせざる所なり」と。^(六)

後漢「儒教国家」において夷狄は、殷と周の後裔である「二王の後」、外戚である「妻の父母」と並んで、王者が「臣とせざるもの」と位置づけられている。理念的には「不臣」の地位に置かれているのである。ただし、その理由は、夷狄が「中和の氣の生ずる所」ではないことに置かれている。こうした生まれが異なるとする夷狄観は、『春秋左氏伝』のそれである（注（四）所掲渡邊論文を参照）。『白虎通』の夷狄の規定は、穀梁伝が述べるような、華夷混一の理想社会を求めるものではなかったのである。

こうした蔑視も影響したのであろう。南匈奴の内部で混乱が起ると、南匈奴が漢に叛くこともあった。順帝の永和五（一四〇）年には、南匈奴の左部の句龍王である吾斯が、車紐らと共に叛いている。度遼將軍の馬続は、国境部隊および烏桓・鮮卑・羌胡の計二万余人を動員し、これを撃破したが、吾斯の抵抗は続いた。これに際して、順帝は、叛乱には係わっていないかつたにも拘らず、去特若尸逐就单于を詰問する。これを苦にした单于是、のちに自殺した。このため吾斯は、車紐を单于に立て、後漢に侵入したが、使匈奴中郎將の張耽は、单于の車紐を馬邑の戦いに大破し、後任の馬寔が刺客により吾斯を殺して、ようやく叛乱は平定された（『後漢書』列伝七十九南匈奴伝）。ここでは、順帝が、句龍王の吾斯が叛いた責任を单于に追究していたことに注目したい。漢は、单于を通じて、匈奴が漢に従うことを強制させていたのである。むろん、かかる統制は、叛かない場合には、匈奴への保護政策となつて現れる。

同じく順帝のとき、朔方より以西の障塞の整備不良により、鮮卑が南侵して匈奴の漸将王を殺したことがあった。单于がこれを憂い恐れ、障塞の修復を求めると、順帝は匈奴を保護するために、障塞を修復している（『後漢書』

列伝七十九 南匈奴伝)。後漢は、匈奴の保護者として、鮮卑から匈奴を守っているのである。

あるいは、桓帝は、延熹元(一五八)年に、叛乱を起こした伊陵戸逐就単于の居車兒を許し、その地位を保証している。

延熹元年、南単于の諸部 並びに畔き、遂に烏桓・鮮卑と与に縁辺の九郡に寇す。張奐を以て北中郎将と為して之を討たしめ、単于の諸部悉く降る。奐単于は国事を統理すること能はざるを以て、乃ち之を拘へ、上りて左谷蠡王を立てんとす。桓帝 詔して曰く、「春秋は正しきに居るを大とす。居車兒は一心に化に向かふ。何の罪ありてか黜けん。其れ遣りて庭に還せ」と。

匈奴の諸部の叛乱を平定した張奐は、その原因を国事を統制できない単于に求め、これを拘束して左谷蠡王を擁立しようとした。ところが、桓帝は「春秋の義」を掲げて、単于更迭を防いだ。桓帝が掲げる「春秋の義」は、『春秋公羊伝』隠公三年の、「君子は正しきに居るを大とす(君子大居正)」を典拠とする。恵棟の『後漢書補注』は、居車兒が叛乱に加わらず、一心に漢の教化に向かっていたことを桓帝が「正しきに居る」という春秋の義によって評価した、と解釈する。首肯し得る見解である。桓帝は、『春秋公羊伝』に基づき、単于を保護して、匈奴が漢の教化の下に正しく居ることを目指したのであつた。こうして体制内異民族の匈奴は、後漢に従い続けたのである。

また、後漢は、匈奴よりも劣る待遇ではあるが、烏桓にも体制内異民族としての地位を与えていた。もともと烏桓は、前漢武帝の匈奴との戦いの際より、漢のために匈奴の動静を探り、「大人」が歳ごとに朝見する体制内異民族で、前漢は護烏桓校尉を置いて、これを保護していた。王莽の対外政策を機に、烏桓も中国に侵攻していたが、後漢を建国した光武帝は、精銳の烏桓突騎(幽州突騎)を擁する漁陽郡と上谷郡を軍事的な基盤とした。後世、「雲台二十八将」と呼ばれる功臣に位置づけられた呉漢・蓋延・王梁(漁陽出身)、景丹・寇恂・耿弇(上谷出身)は、光武帝の騎兵の主力であつた。天下を平定した光武帝は、長城外の烏桓を服属させるため、伏波將軍の馬援を送り、三千の騎兵を率いさせ、五原関から出撃させたが成果はなかつた。

それでも、光武帝の建武二十五年(四九)年、烏桓の「大人」郝旦ら九百二十二人が、關に至つて朝貢する。そのとき、夷狄の中で烏桓は特別視されたことが、次のように伝えられている。

是の時四夷朝貢し、絡駟として至る。天子乃ち命じて大いに会して勞ひ饗し、賜ふに珍宝を以てす。烏桓 或ひは留まりて宿衛せんことを願ふ。是に於て其の渠帥を封じて侯王・君長と為す者 八十一人、皆塞内に居り、縁辺の諸郡に布く。種人を招来し、其の衣食を給せしめ、遂に漢の偵候と為り、匈奴・鮮卑を撃つことを助く。

烏桓は、数多の朝貢した夷狄の中で、例外的に「宿衛」を願い、漢から「侯王・君長」に八十一名の多きが封建され、「漢の偵候」となつて「匈奴・鮮卑を撃つことを助」けた。そして、南匈奴と同様、このとき烏桓は中国内に移住を許された。遼東郡属国・遼西郡・右北平郡・漁陽郡・広陽郡・上谷郡・代郡・雁門郡・太原郡・朔方郡に分居し、また長城外の烏桓にも移住するよう働きかけさせた。烏桓が、匈奴よりもさらに従属性の強い体制内異民族であつたことを理解できる。川本良昭は、長城という巨大な建造物を通じて分断されていた中国と胡が、それを乗り越える形で交流を顕在化させる始まりとして、これを注目すべき現象としている。

もちろん烏桓が、こののち漢に対して全く叛かなかつたわけではない。明帝の永平年間(五八〜七五年)には、漁陽烏桓の大人の欽志賁が部族を糾合して背き、鮮卑も後漢へ攻撃を始めた。遼東太守の祭彤は、欽志賁を暗殺し、これを平定している。また、安帝期には、漁陽・右北平・雁門の烏桓の率衆王である無何らが、鮮卑や匈奴と連合して、代郡・上谷郡・涿郡・五原郡を略奪した。安帝は、大司農の何熙に車騎將軍を兼任させ、近衛兵を旗下につけて、国境地帯の七つの郡と黎陽宮の兵士、あわせて二万の軍で攻撃し、撃破した。これ以後、烏桓は、ふたたび後漢に接近したので、大人の戎末廐を都尉とした。順帝期に戎末廐は、配下の咄婦や去延らを率い、護烏桓校尉の耿种に従つて鮮卑を攻めて功績をあげ、それぞれ率衆王の位を与えられている。

このように、匈奴と烏桓は、後漢「儒教国家」が形成する中華と夷狄の世

界観において必須とされる体制内異民族と位置づけられ、一時的に叛くこともあるにせよ、多くは漢のために戦い続けた異民族なのであった。

三、陛下の赤子

こうした匈奴と烏桓の漢との関係を背景に、漢の異民族観も変容していく。章帝期に行われた白虎観會議の議論をまとめた『白虎通』では、匈奴をはじめとする夷狄は、「中和の氣の生ずる所」ではないとされていた。これに対して、桓帝期に党錮の禁に遭い、漢の再興を信じながら、『春秋公羊伝』に注を付けた何休は、「夷狄進みて爵に至る」ことにより、「太平」が齎されると主張する。

『春秋公羊経伝解詁』隠公元年において、何休は次のように注をつけている。

〔傳〕見る所辞を異にし、聞く所辞を異にし、伝へ聞く所辞を異にす。

〔注〕……①傳へ聞く所の世に於ては、治は①衰乱の中に起るを見るはし、心を用ふること尚ほ羈輶なり、故に①其の国を内にして諸夏を外にす。……②聞く所の世に於ては、治は②升平に見はれ、②諸夏を

内にして夷狄を外にす。……③見る所の世に至りては、治は③太平に

著はれ、③夷狄進みて爵に至り、天下の遠近・小大は一の若し。

①衰乱（所伝）の世では、自国以外は華夏の諸国といえども外にするが、②升平（所聞）の世では、夷狄は外にしても華夏諸国には自他の区別を設けない。そして、③太平（所見）の世では、夷狄は進んで爵に至り、華夏と夷狄の区別も消滅して、天下はすべて一同に帰するといふのである。こうした何休注の夷狄との共存を目指す発想は、經学的には穀梁伝の影響として説明し得る。『穀梁廢疾』を著し、公羊の優位を主張した何休であるが、經典解詁に現れた夷狄観には穀梁伝の影響を色濃くみることができるのである。

しかし、何休が生きた後漢の現実には、「太平」とは程遠い有り様であった。宦官の専横により国政は紊乱し、それを批判した李膺たちは、延熹九（一六六）年、党人として禁錮された。第一次党錮の禁である。何休が党人の領袖である陳蕃の辟召を受け、現実政治の改革を目指したのは、桓帝の崩御を機に建寧元（一六八）年に、外戚の竇武が陳蕃を太傅に拔擢したためであった。

ところが、翌建寧二（一六九）年、竇武と陳蕃が宦官の誅滅に失敗すると、何休は第二次党錮の禁に連坐した。『春秋公羊経伝解詁』は、このうち党錮を解かれる光和二（一七九）年までの間に著されたものとされる（『後漢書』列伝六十九下 儒林 何休伝）。したがって、何休の夷狄観には、党人の領袖であった陳蕃の異民族政策の影響もあった。陳蕃は、異民族について、次のように上奏している。

時に零陵・桂陽の山賊害を為し、公卿議して遣はして之を討たしめん
とす。……（陳蕃）曰く、「昔高祖の創業するや、万邦は肩を息ませ、
百姓を撫養し、之を赤子に同じくす。今二郡の民も、亦た陛下の赤子
なり。赤子をして害を為さしむるを致すは、豈に所在貪虐にして、其
れをして然せしむるには非ずや。宜しく厳しく三府に勅し、牧・守・令・
長を隱覈せしむべし。其の政に在りて和を失ひ、百姓を侵暴する者有ら
ば、即ち便ちに挙奏し、更めて清賢奉公の人にして、能く法令を班宣す
るに情は愛恵に在る者を選ばば、王師を勞はさずして、而して羣賊は弭
息す可し」と。

陳蕃は夷狄の「山賊」もまた、「陛下の赤子」であるとして、その討伐に反対している。こうした陳蕃の夷狄認識は、夷狄もまた「天地の生む所」であるとすると何休の夷狄認識と相通じる。陳蕃の場合には、さらに進んで、「陛下の赤子」すなわち、夷狄も中国を構成する一要素と認識しているのである。何休は、經典解詁の整合性を保つ必要があった。ゆえに、陳蕃ほどに強く夷狄を「陛下の赤子」と位置づけられなかった。「太平」の世に至れば、「夷狄進みて爵に至る」と述べるのが、強い攘夷思想を含む公羊伝の經典解詁としては限界であったのだろう。

これに対して、陳蕃の思想は、自ら国政に関与する中で抱いた夷狄観である。陳蕃が夷狄を「陛下の赤子」と上奏した際に、国政を掌握していた者は、後漢の外戚の中で最も専横をきわめた梁冀であった（『後漢書』列伝五十六 陳蕃伝）。梁冀を始めとする後漢の外戚は、羌族などの夷狄を自らの軍に編入して軍事力を教化する一方で、奴隸のように搾取する異民族政策を遂行していた。陳蕃は、羌族などの夷狄を虐げていく、外戚に多く見られる異民族

政策に対抗する中で、主として匈奴や烏桓に施行されていた後漢に伝統的な寛容を旨とする異民族政策を対置した。それによって、自らの政治の方向性を示したと考えてよい。

竇武は、梁冀と同じく外戚でありながら、宦官と対抗するために陳蕃と組んだ。そして、竇武と陳蕃が第二次党錮の禁の際、宦官に殺害された後に、宦官の打倒を目指した者が、同じく外戚の何進であり、それを支えた者が袁紹であった。したがって、袁紹は、陳蕃の異民族政策を継承すべき政治的立場にある。それは、夷狄を体制内異民族として位置づけ、保護をする代わり、その軍事力を利用するという後漢の伝統的な異民族政策であった。

四、於扶羅と蹋頓

光武帝以来の体制内異民族として優遇されてきた南匈奴は、後漢における經典解釈の展開の中で形成されていく夷狄を許容する異民族観をも受けながら、黄巾の乱に際して後漢を援助する。单于の羌渠は、中平中に右賢王の於扶羅の率いる援兵を派遣して、後漢を支援した(『三国志』卷一 武帝紀注引『魏書』)。中平四(一八七)年になって、前中山太守の張純が烏桓・鮮卑とともに叛乱を起こすと、ふたたび单于の羌渠は、霊帝の詔を受けて幽州牧の劉虞の指揮下に入るため、左賢王に兵力を授けて援軍とする(『後漢書』列伝七十九 南匈奴伝)。しかし、その負担は大きかった。

中平四年、前の中山太守たる張純 反畔し、遂に鮮卑を率ゐて辺郡を寇す。霊帝 詔して南匈奴の兵を發し、幽州牧の劉虞に配して之を討たしむ。单于 左賢王を遣はして騎を將ゐて幽州に詣らしむ。国人 单于の兵を發して已むこと無きを恐れ、五年、右部の醯落は休著各胡の白馬銅ら十余万人と与に反し、攻めて单于を殺す^(二八)。

霊帝の期待に单于は応え続けようとした。しかし、匈奴の国人たちは、度重なる徴兵に耐えきれず、中平五(一八七)年、右部の醯落が单于の羌渠を殺害するに至る。これを受けて、後漢を支援してきた於扶羅が单于の位に即くが、羌渠を殺した国人たちは、別に須卜骨都侯を共立して单于に立てた。本国の国人たちから单于の地位を認められなかった於扶羅は、後漢を頼る。

持至戸逐侯单于の於扶羅、中平五年に立つ。国人の其の父を殺せし者遂に畔き、共に須卜骨都侯を立てて单于と為す。而して於扶羅 闕に詣りて自ら訟へんとす。会々霊帝崩じ、天下 大いに乱る。单于 数千騎を將ゐ、白波賊と兵を合して、河内の諸郡に寇す。時に民皆 保聚し、鈔掠するも利無く、而して兵 遂に挫傷す。復た国に帰らんと欲するも、国人 受けざれば、乃ち河東に止まる。須卜骨都侯は单于と為ること一年にして死す。南庭 遂に其の位を虚しくし、老王を以て国事を行はしむ^(二九)。

於扶羅は、自らの即位が国人に認められなかったことを後漢に訴え、後漢の力を借りて、自らの地位を守ろうとした。しかし、霊帝の崩御もあって、後漢は於扶羅を支援することができなかった。戻る場所を失っていた於扶羅は、河東郡に止まる。一方、国人の支持を得ていた須卜骨都侯が一年で卒すると、以後、南匈奴は单于を立てることができず、事実上ここに滅亡する。漢と命運を共にしたのである。

このうち、於扶羅は、反董卓連合軍が結成されると、張楊と共に袁紹に属した。袁紹こそ、後漢の体制内異民族政策の継承者であったためであろう。しかし、袁紹は、於扶羅の单于の地位を保証することはなかった。初平元(一九〇)年より、袁紹は、幽州牧の劉虞を皇帝に擁立しようとしており(『三国志』卷一 武帝紀)、後漢の朝廷より於扶羅に单于の地位を引き出すことができなかったのである。初平二(一九一)年、於扶羅は張楊を人質にとつて袁紹に背いたが、袁紹配下の麴義に敗れた。初平四(一九三)年には、陳留郡に進出した袁術を黒山賊とともに支援する。皇帝を称する準備をしていた袁術にとって、北方の異民族を象徴する匈奴を勢力下に収めることは、理念的にも重要な意味を持った。しかし、袁術は曹操に敗れ、最終的に於扶羅は曹操に降服する(『後漢書』列伝七十九 南匈奴伝)。

一方、烏桓は、袁紹に従い続けた。於扶羅の離反に学んだのか、袁紹が烏桓を体制内異民族として積極的に位置づけたためである。

建安の初、冀州牧の袁紹、前將軍の公孫瓚と相持して決せず。蹋頓使を遣はして紹に詣りて和親を求め、遂に兵を遣はして助けて瓚を撃ち、

之を破る。紹制と矯りて蹋頓・難楼・蘇僕延・烏延らに賜ふに、皆単于の印綬を以てす。^(三〇)

袁紹と公孫瓚との対峙中、王を自称していた丘力居の子である楼班が年少であることに乗じて、烏桓の実権を握った従子の蹋頓は、自らの地位を確立するため、袁紹に協力して公孫瓚を撃つことを申し出た。袁紹は、朝廷の「制」(命令)と偽って、蹋頓・難楼・蘇僕延・烏延らに単于の称号と印綬を附与する。匈奴の南単于の不在をよいことに、その地位を烏桓に与えたのである。袁紹が、後漢の体制内異民族政策を継承していることを理解できる。

ただし、ここで袁紹は、単于の地位を蹋頓一人に与えていない。蹋頓は、独裁的な権力を確立できてはいなかったと考えてよい。また、袁紹も、烏桓の権力者が一人になることを望まなかった。このため、烏桓の内部では混乱が続いた。

後に難楼・蘇僕延、其の部衆を率ゐて楼班を奉じて単于と為し、蹋頓を王と為すも、然れども蹋頓猶ほ計策を兼る。広陽の人たる閻柔、少くして烏桓・鮮卑の中に没し、其の種人の帰信する所と為る。柔乃ち鮮卑の衆に因り、烏桓校尉の邢挙を殺して之に代はる。袁紹因りて柔を寵慰して、以て北辺を安んず。^(三一)

蹋頓と同様、袁紹から単于の地位を与えられていた難楼・蘇僕延は、丘力居の子である楼班を単于に立てるため、政変を敢行した。しかし、蹋頓をも王の地位に留めたように、楼班を頂点とする権力もまた確立していなかった。そうした中、若い時に捕らえられ、烏桓と鮮卑のもとで成長した漢人の閻柔は、鮮卑部族の力を借りて、護烏桓校尉の邢挙を殺し、自ら護烏桓校尉に就いた。こうした混乱した状況に際して、袁紹は、閻柔をも懐柔して、烏桓との関係を安定化させた。

これにより、袁紹は全力を挙げて南下することができた。しかし、袁紹は、建安五(二〇〇)年、官渡の戦いで曹操に敗れ、建安七(二〇二)年、後継者を定めないうちに死去する。このため、袁紹の長子である袁譚は、三男の袁尚と対立し、曹操の離間策もあって、両者は武力で対立する。曹操の介入に敗れた袁尚が、二男の袁熙とともに逃げ込んだ先は、烏桓の蹋頓のもとで

あった。

紹の子たる尚の敗るるに及び、蹋頓に奔る。時に幽・冀の吏人の烏桓に奔る者は十万余戸、尚は其の兵力に憑り、復た中国を図らんと欲す。曹操の河北を平ぐるに会たり、閻柔は鮮卑・烏桓を率ゐて帰附す。操即ち柔を以て校尉と為す。建安十二年、曹操自ら烏桓を征し、大いに蹋頓を柳城に破り之を斬り、首虜は二十余万人。袁尚・楼班・烏延らと与に皆遼東に走るるも、遼東太守の公孫康、並な斬りて之を送る。其の余衆たる万余落、悉く中国に徙居すとしか云ふ。^(三二)

蹋頓は、袁尚・袁熙を助けて曹操と戦った。しかし、烏桓の事情を熟知している閻柔が曹操に帰順したこともあって、柳城の戦いに敗れて斬られた。代わって、楼班・烏延らが袁尚・袁熙と共に遼東まで逃れたものの、遼東太守の公孫康に斬られた。残余の烏桓は、中国国内に強制移住させられ、その精強な騎兵は、曹操軍に組み込まれた。^(三三) 後漢の匈奴・烏桓政策を継承した袁紹の勢力もまた、ここに滅亡したのである。

おわりに

前漢期より和蕃公主を降嫁させるなど、^(三四) 後漢にとつて、最も近い夷狄であった匈奴は、後漢の祭祀体系にも組み込まれた体制内異民族であった。後漢は、南匈奴の単于を保護・統制し、匈奴もまた後漢を守るために戦った。もちろん、一時的には離反することもあったが、黄巾の乱を契機とする後漢の危機に際して、南単于は、漢の救援のために於扶羅を派遣した。しかし、混乱を極めていた後漢は、於扶羅に守ってもらうことも、於扶羅を守ることができなかった。於扶羅は、曹操に降服し、南匈奴は漢と命運を共にする。

こうした後漢の匈奴、さらには烏桓に対する後漢の体制内異民族政策を規定したものは『春秋公羊伝』であり、その注釈を集成した何休は、陳蕃の故吏であった。政治的に陳蕃の後継者である袁紹は、この異民族政策を継承する。このため、袁紹は、烏桓の協力を得て公孫瓚を打倒できたが、曹操には官渡の戦いで敗れる。それでも、烏桓は、袁紹の二子を手助けして、曹操と戦いを続けていく。体制内異民族であった匈奴と烏桓は、最後まで自らの保護

者であつた後漢と袁紹を守ろうとしたのである。

後漢の異民族政策のすべてが、異民族との融和を目指す儒教理念に基づいて行われたわけではない。体制外異民族であつた羌族には隷属を強い、その兵を外戚の基盤としていく。その後継者が董卓である。そして、羌族の抵抗には、徹底的な武力鎮圧を行うが、その主体となつた西北列将の後裔、それが曹操である。これらの問題については、稿を改めて論ずることにしたい。

注

- (一) 青木栄二『三国志の歴史地理学』(『新しい漢字漢文教育』四五、二〇〇七年)。より大きな視座で、気候変動と東アジア史との関係を論ずる妹尾達彦「人類史と東アジア史の時代区分」(『中国史の時代区分の現在』汲古書院、二〇一五年)も参照。
- (二) 匈奴に関しては、内田吟風『北アジア史研究』匈奴篇(同朋舎出版、一九七五年)、林幹『匈奴通史』(人民出版社、一九八六年)という代表的研究のほか、沢田勲『匈奴』(東方書店、一九九六年)、林幹(編)『匈奴史論文選集』(中華書局、一九八三年)、林幹『匈奴歴史年表』(中華書局、一九八四年)、劉学鋹『匈奴史論』(南天書局、一九八七年)、陳序経『匈奴史稿』(中国人民大学出版社、二〇〇七年)などがある。
- (三) 烏桓に関しては、内田吟風『北アジア史研究』鮮卑・柔然・突厥篇(同朋舎出版、一九七五年)、馬長寿『烏桓与鮮卑』(上海人民出版社、一九九二年)という古典的研究のほか、船木勝馬『古代遊牧騎馬民の国』(誠文堂新光社、一九八九年)、馬植傑『三国時代の匈奴和烏桓、鮮卑』(『三国史』人民出版社、一九九三年)、白翠琴『烏桓与東郡鮮卑の内遷及其発展』(『魏晉南北朝民族史』四川民族出版社、一九九六年)などがある。
- (四) 以上の経緯を含め、両漢時代の華夷思想については、渡邊義浩『両漢における華夷思想の展開』(『両漢儒教の新研究』汲古書院、二〇〇八年、『後漢における「儒教国家」の成立』に所収)を参照。
- (五) 王莽の世界観とその対外政策については、渡邊義浩『理念の帝国—王莽の世界観と「大一統」—(『知のユーラシア』明治書院、二〇一一年)を参照。
- (六) 南単于復遣使詣闕、奉藩^①称臣、献国珍宝、求使者監護、遣侍子、^②修旧約(『後漢

書』列伝七十九南匈奴伝)。

- (七) 『後漢書』列伝九耿弇伝附耿国伝に、「(耿)国独り曰く、「臣以為へらく、宜しく孝宣の故事の如く之を受くべし」と。……帝其の議に従ひ、遂に比を立てて南単于と為す(耿)国独曰、臣以為、宜如孝宣故事受之。……帝從其議、遂立比為南単于」とある。

- (八) (建武)二十六年、遣中郎将段郴・副校尉王郁、使南単于立其庭。去五原西部塞八十里。南単于乃延迎使者。使者曰、南単于当^①伏拝受詔。南単于願望有頃、乃伏^②称臣。拝訖、令詔曉使者曰、南単于新立、誠慙於左右。願使者衆中無相屈折也。骨都侯等見、皆泣下。郴等反命、詔乃聽南単于入居雲中(『後漢書』列伝七十九南匈奴伝)。

- (九) 南匈奴の内附については、内田吟風『南匈奴に関する研究』(『北アジア史研究』匈奴篇、前掲所収)のほか、関海霞・崔明德「試論南匈奴内附于漢的原因及其影響」(『魯東大学学報』哲学社会科学版、二四—二、二〇〇七年)を参照。後漢の南匈奴政策全般については、胡玉春「南匈奴与東漢的政治關係及其社会变革」(『内蒙古社会科学』漢文版、二八—六、二〇〇七年)、王平「論東漢對南匈奴的政策」(『白城師範学院学報』二二—一、二〇〇八年)を参照。

- (一〇) 南単于歳尽輒遣使奉奏、送侍子入朝、中郎将從事一人、将領詣闕。漢遣謁者、送前侍子、還南単于庭、交会道路。元正朝賀、拜祠陵廟畢、漢乃遣南単于使、令謁者将送。賜綵繪千匹・錦四端・金十斤・太官御食醬、及橙橘・龍眼・荔枝、賜南単于母、及諸閼氏・南単于子、及左右賢王・左右谷蠡王・骨都侯有功善者、繪綵合万匹。歳以為常(『後漢書』列伝七十九南匈奴伝)。

- (一一) 後漢「儒教国家」については、渡邊義浩『後漢における「儒教国家」の成立』(汲古書院、二〇〇九年)を参照。

- (一二) 東都之儀、百官・四姓親家婦女・公主・諸王大夫・外国朝者侍子・郡国計吏会陵。昼漏上水、大鴻臚設九賓、随立寢殿前(『統漢書』志四礼儀上)。

- (一三) 上計吏については、鎌田重雄『郡国の上計』(『史潮』二二—三・四、一九四三年、『秦漢政治制度の研究』日本學術振興会、一九六二年に所収)、曾我部静雄「上計吏と朝集使」(『国士館大学人文学会紀要』二、一九七〇年)を参照。

- (一四) 九賓、謂王・侯・公・卿・二千石・六百石下及郎・吏・匈奴侍子、凡九等(『統漢書』志四礼儀上引薛綜注)。外国の侍子が匈奴に限定されなかったことは、『後漢紀』

卷二十三 靈帝紀建寧五年の条に、「西域三十六国の侍子」とあるように、西域の諸国からも侍史が送られていたことから明らかである。それらの中で匈奴は「九賓」として別格の扱いを受けたと考えてよい。

- (二五) 王者所不臣者三、何也。謂二王之後、妻之父母、夷狄也。……夷狄者、与中国絶域異俗、非中和氣所生、非礼義所能化、故不臣也。春秋伝曰、夷狄相誘、君子不疾。尚書大伝曰、正朔所不加、即君子所不臣也(『白虎通』「王者不臣」)。「白虎通」は、陳立『白虎通疏証』(中華書局、一九九四年)を底本とした。また、『白虎通』の後漢「儒教国家」における意義については、渡邊義浩「後漢儒教の固有性」(『両漢の儒教と政治権力』汲古書院、二〇〇五年)、『後漢における「儒教国家」の成立』前掲所収)を参照。

- (二六) 延熹元年、南单于諸部並畔、遂与烏桓・鮮卑寇縁辺九郡。以張奐為北中郎將討之、单于諸部悉降。奐以单于不能統理国事、乃拘之、上立左谷蠡王。桓帝詔曰、春秋大居正。居車兒一心向化。何罪而黜。其遣還庭(『後漢書』列伝七十九南匈奴伝)。

- (二七) こうした教化の結果、『後漢書』列伝七十九南匈奴伝に、「夏、新たに降れる一部の大人たる阿族ら遂に反畔し、呼尤微を脅して与に俱に去らんと欲す。呼尤微曰く、「我は老いたり。漢家の恩を受けたれば、寧ろ死すとも相隨ふ能はず」と(夏、新降一部大人阿族等遂反畔、脅呼尤微欲与俱去。呼尤微曰、我老矣。受漢家恩、寧死不能相隨)」とあるように、匈奴の温禺犢王の呼尤微は、漢家の恩を掲げて、漢への叛乱に加わらないとの意思を表明するに至っている。

- (二八) 護烏桓校尉、ならびに匈奴を統括した使匈奴中郎將については、船木勝馬「烏桓校尉・匈奴中郎將をめぐる諸問題」(『江上波夫教授古稀記念論集』歴史編、山川出版社、一九七七年)を参照。なお、久保靖彦「後漢初頭の烏桓について―護烏桓校尉に関する一考察」(『史苑』二四―一、一九六三年)、林幹「兩漢時期護烏桓校尉略考」(『内蒙古社会科学』一九八七―一、一九八七年)、何天朝「兩漢皇朝解決北方民族事務的統治機構―護烏桓校尉」(『内蒙古師大学報』漢文哲学社会科学版、一九八七―一、一九八七年)もある。また、烏桓の南下については、李莎「論兩漢時期烏桓・鮮卑南遷的原因及対漢匈奴關係的影響」(『咸陽師範学院學報』二七―三、二〇一二年)を参照。

- (二九) 是時四夷朝賀、絡駢而至。天子乃命大会勞饗、賜以珍宝。烏桓或願留宿衛。於

後漢の匈奴・烏桓政策と袁紹

是封其渠帥為侯王、君長者八十一人、皆居塞内、布於縁辺諸郡。令招来種人、給其衣食、遂為漢偵候、助擊匈奴。鮮卑(『後漢書』列伝八十烏桓伝)。なお、『後漢書』烏桓伝と『三国志』烏桓伝とを比較することで、それぞれの資料の偏向を指摘する吉本道雅「烏桓史研究序説」(『京都大学文学部研究紀要』四九、二〇一〇年)には重要な指摘が多い。

- (二〇) 川本良昭「三国期段階における烏桓・鮮卑について―交流と変容の観点から見た」(『国立歴史民俗博物館研究報告』五一、二〇〇九年)。

- (二一) 以上、『後漢書』列伝八十 烏桓伝。また、趙紅梅「烏桓朝貢東漢王朝探微」(『社会科学輯刊』二〇一―一六、二〇一一年)は、烏桓の後漢への朝貢をその従属性などにより三期に分類している。すなわち、朝貢活動が遼西・遼東烏桓を中心としていた光武帝の建武二十五(四九)年から明帝の永平十六(七三)年、降伏を乞うことが中心となる安帝の永初三(一〇九)年から桓帝の延熹九(一六六)年、三郡烏桓が朝貢の中心となる中平五(一八八)年から建安十二(二〇七)年の三期である。また、王慶献「烏桓鮮卑勢力消長」(『内蒙古大学学报』哲学社会科学版、一九九一―四、一九九一年)も参照。

- (二二) 「伝」所見異辞、所聞異辞、所伝聞異辞。〔注〕……於①所伝聞之世、見治起於①衰乱之中、用心尚羈拘、故①内其国而外諸夏。……於②所聞之世、見治②升平、②内諸夏而外夷狄。……至③所見之世、著治③太平、③夷狄進至於爵、天下遠近・小大若一(『春秋公羊経伝解詁』隠公元年)。

- (二三) 田中麻紗巳「春秋公羊解詁」の「太平」について(『人文論叢』三六、一九八八年)、『後漢思想の探究』研文出版、二〇〇三年に所収)は、何休の「太平」について、中国国内の治世である狭義の太平を考え、さらにこれを展開した理想的な広義の太平をも描こうとした、としている。

- (二四) 党錮の禁に関しては、渡邊義浩「後漢時代の党錮について」(『史叢』六、一九九一年)、『後漢国家の支配と儒教』雄山閣出版、一九九五年に所収)を参照。

- (二五) 時零陵・桂陽山賊為害、公卿議遣討之。……(陳蕃)曰、昔高祖創業、万邦息肩、撫養百姓、同之赤子。今二郡之民、亦陛下之赤子也。致令赤子為害、豈非所在貪虐、使其然乎。宜嚴勅三府、隱覈牧・守・令・長。其有在政失和、侵暴百姓者、即便拳奏、更選清賢奉公之人、能班宣法令情在愛惠者、可不勞王師、而羣賊弭息矣(『後漢書』

列伝五十六陳蕃伝。

(二六) 馬援から始まる、外戚が自らの軍事力に羌族など夷狄を編入する政策については、渡邊義浩「後漢の羌・鮮卑政策と董卓」(『三国志研究』一〇、二〇一五年)を参照。

(二七) 後漢末、遼西烏桓の丘力居、上谷烏桓の難楼は王を自称し、また、遼東属国烏桓の蘇僕延は峭王、右北平烏桓の烏延は汗魯王と自称していた。中山太守であった張純は、亡命して丘力居の配下に入ると、自ら弥天安定王と号し、三郡烏桓の総指揮者となり、青・徐・幽・冀の四州を攻撃した(『後漢書』列伝七十九南匈奴伝)。こうした張純のあり方は、涼州において韓遂や馬騰が羌族を糾合したことに似ており、漢民族が文化的格差を利用して異民族の指導者になっていく事例と考えられる。

(二八) 中平四年、前中山太守張純反畔、遂率鮮卑寇遼郡。靈帝詔發南匈奴兵、配幽州牧劉虞討之。单于遣左賢王將騎詣幽州。国人恐单于發兵無已、五年、右部醯落与休著各胡白馬銅等十余万人反、攻殺单于(『後漢書』列伝七十九南匈奴伝)。

(二九) 持至尸逐侯单于於扶羅、中平五年立。国人殺其父者遂畔、共立須卜骨都侯為单于。而於扶羅詣闕自訟。会靈帝崩、天下大乱。单于將数千騎、与白波賊合兵、寇河内諸郡。時民皆保聚、鈔掠無利、而兵遂挫傷。復欲歸国、国人不受、乃止河東。須卜骨都侯為单于一而死。南庭遂虛其位、以老王行国事(『後漢書』列伝七十九南匈奴伝)。

(三〇) 建安初、冀州牧袁紹与前將軍公孫瓚相持不決。蹋頓遣使詣紹求和親、遂遣兵助擊瓚、破之。紹矯制賜蹋頓、難楼、蘇僕延・烏延等、皆以单于印綬(『後漢書』列伝八十烏桓伝)。

(三一) 袁紹と公孫瓚の対決、それぞれの政権の特徴については、渡邊義浩「三国政権形成前史―袁紹と公孫瓚」(『吉田寅先生古稀記念 アジア史論集』東京法令出版、一九九七年、『三国政権の構造と「名士」』汲古書院、二〇〇四年に所収)を参照。

(三二) 後難楼、蘇僕延、率其部衆奉楼班為单于、蹋頓為王、然蹋頓猶秉計策。広陽人閻柔、少没烏桓・鮮卑中、為其種人所歸信。柔乃因鮮卑衆、殺烏桓校尉邢挙而代之。袁紹因寵慰柔、以安北辺(『後漢書』列伝八十烏桓伝)。

(三三) 及紹子尚敗、奔蹋頓。時幽・冀吏人奔烏桓者十万余戸、尚欲憑其兵力、復図中国。会曹操平河北、閻柔率鮮卑・烏桓歸附。操即以柔為校尉。建安十二年、曹操自征烏桓、大破蹋頓於柳城斬之、首虜二十余万人。袁尚与楼班・烏延等皆走遼東、遼東太守公

孫康、並斬送之。其余衆万余落、悉徙居中国云(『後漢書』列伝八十烏桓伝)。

(三四) 曹操の烏桓征服については、張作耀「曹操征烏桓は域内統一戦争」(『烟台大学学报』哲学社会科学版、一九九一年、一九九一年)、李大龍「簡論曹操對烏桓的征討及意義」(『史學集刊』二〇〇五—三、二〇〇五年)がある。曹操軍に組み込まれた烏桓については、張晉「探析烏桓三次南遷中的騎兵因素」(『陰山學刊』二八—二、二〇一五年)を参照。

(三五) 前漢時代の和蕃公主については、佐々木満実「漢代和蕃公主考―「和親」との関係を中心に」(『お茶の水史学』五四、二〇一一年)を参照。

Yuan Shao and the Later Han' s Policies towards the Xiongnu and Wuhuan

Yoshihiro WATANABE

Abstract

The Xiongnu 匈奴, who were the closest to the Later Han dynasty among the non-Chinese Yi-Di 夷狄, were a foreign tribe who had been integrated into the Han regime and were also incorporated into the Later Han system of sacrifices. The Later Han protected and controlled the shanyu 單于 of the southern Xiongnu, and the Xiongnu fought to defend the Later Han. Of course, there were occasions when the Xiongnu became temporarily disaffected towards the Chinese, but at the time of the Later Han' s crisis occasioned by the Yellow Turban Rebellion, the *shanyu* of the southern Xiongnu sent Yufuluo 於扶羅 to assist the Han against the rebels. However the Later Han, who had fallen into utter disorder, were able neither to avail themselves of Yufuluo' s protection nor to protect Yufuluo, who surrendered to Cao Cao 曹操, and the southern Xiongnu shared the fate of the Han dynasty.

These Later Han policies towards foreign tribes who had been integrated into the Han regime, such as the Xiongnu and also the Wuhuan 烏桓, were determined by the *Chunqiu Gongyang zhuan* 春秋公羊傳, and He Xiu 何休, who wrote a commentary on the *Chunqiu Gongyang zhuan*, had been an official under Chen Fan 陳蕃. Yuan Shao 袁紹, who was Chen Fan' s political successor, took over these policies towards foreign tribes. Consequently, he was able to overthrow Gongsun Zhan 公孫瓚 with the cooperation of the Wuhuan, but he was defeated by Cao Cao at the Battle of Guandu 官渡. Nonetheless, the Wuhuan assisted Yuan Shao' s two sons and continued to fight against Cao Cao. The Xiongnu and Wuhuan, both foreign tribes integrated into the Han regime, attempted to the very end to defend the Later Han and Yuan Shao, who had been their protectors.